

報告は省略。質疑応答のみ

◎「いわゆる南京事件」について

(記者)

今朝の南京の共産党の方との会合の中で、市長が「南京事件はなかった」と。これは前からおっしゃっていると、事前のご説明もありましたが、あえて今日、南京の方がいらっしゃる前で述べられた理由というのは。あらためてちょっと教えていただけますか。

(市長)

それは、将来の、特に日本国の子孫の皆さんのためにですね。やっぱり南京で日本軍が30万人の、いわゆる一般市民を虐殺したということはずっと語り継がれて、その記念館まであると。アメリカの、ロサンゼルスにおける歴史の副読本には、40万人と書いてあるということ、真実をたずねるのは、63歳になった、じいさまからすると、私の社会的、政治的使命だと思ってるからです。

(記者)

発言の最後の方で、「討論会を開きたい」というお話があって、南京で開いてもいいかなと。具体的にはどういうイメージをされているのでしょうか。

(市長)

だから、何人か出て行ってですね、私も行きますけれど、やっぱり南京で、現場でやるのがいいですから。

(記者)

南京でやるんですね。

(市長)

南京でやるんですね。だから、こちら側の主張。論点は幾つかありますから、3つか4つか5つぐらいに絞って、このことについてはどうだった、こうだったということ、きちっといっぺん、日本人としての主張をはっきり言っていくと。

残念ながら一般的な戦闘行為はありまして、亡くなった方はみえます。中で、捕虜収容所で放火事件があって、そこで銃撃事件になってしまって、それで一般の方が亡くなったり、その犯人と思われる方を連れてきて、揚子江で処刑したという残念なことはあるんで

すけれど。それから、揚子江に残った中国の方を逃がそうと思って
実は船に乗せたんだけど、夜だったから、向こうの蒋介石の軍隊
が間違えて発砲してきて、そこで大変多くの方が亡くなったとかで
すね。そういう方の死体が揚子江に上がってしまったという悲しい
事態。

そういうことの評価等につきましても。やっぱり向こうで、現地
で。やっぱり言うことを言わないかん、ちゃんと。言わな。何でも
ええで、「すみません、すみません」と言って。「ええわ、ええわ」
ではいかんのです。と思いますよ。こんなことが固定されてね。

私、何べんも言うけれど、ショックを受けたのは、前から南京事
件は勉強していましたが、南京事件を勉強して、一般的な戦闘
行為はあったけれど、「いわゆる南京虐殺」はなかったというのが、
私はその立場なんですけれど。

何べんも言いますけれど、ロサンゼルスは名古屋の姉妹都市なも
んで。1年前かな、1年半ぐらい前だわ、大津通りのレストランで
すわ。公式行事ですよ、夜、歓迎行事で。ミス2世、マリリン・モ
ンローにどえらい似た、どえらいべっぴんだったですけれど、かわ
い子ですけれど、私の横において、訳の分からん英語でしゃべっ
とったんです、酒を飲んで。

そうしたら、ミス2世が、「Mr. Kawamura, Mr. Mayor (市長)」と。
「日本人って中国でひどいことをしたんだね」と言うわけですよ。
「え？」と言って、「それ、何？」と言ったら、「南京でひどい虐
殺があったらしいです」と言うもんだで、「え？」と言って、「あ
んた、どこで勉強したの」と言ったら、「ハイスクール (高校) の
歴史の授業で勉強しました」と言うもんで、びっくりこいてですね。

それから、調べたんですよ、こっちで。ありますよ。そうしたら、
やっぱり高校の副読本ですけれど、出てきまして、40万人の
non-armed citizens ですか。いわゆる「非武装の市民を日本軍は
虐殺した」という記事が載っとるんですよ。高校の教科書に。あれ
はショックだったですね。

日本人は原爆なんかがあって、一定の被害者意識を持っていまし
て、言っていますけれど。被害者意識って、原爆碑文でもとんでも
ないですけれど、持っていますけれど。実はアメリカ人はこういう
認識なんだと。教科書に書いてあるがねと。副読本だけれどね。

あれから、これはまたさらに言っていないと。友好都市だから、
さらに真実を言わないと。南京、広く言えば中国、南京でもいいん
だけれど、喉の奥に刺さったとげをきちっと抜かないかん。堂々と

言いに行かないかんですよ。という社会的使命、ミッションを深く感じとるところです。

古い先短いですから、あとのいろんな。僕もこれで 63 年間生活させていただきましたけれど、この問題だけはきちっとして、日本の将来の子どもさんたちのためにプレゼントしていこうかと。真実を語ってですね。そういうふうに思っております。

(記者)

ちなみに、今日の南京市の方の反応をどう思われましたか。ちょっと周囲がうるさくて、なかなか聞こえていなかったと思うのですが。

(市長)

反応は、なかなかびっくりした感じじゃなかったですか。びっくりもしていない、淡々としておられましたね。にこにこされていましたね。それで、「ぜひ討論会をやりましょう」と言って。

僕の場合は、死んだおやじが南京で終戦を迎えていましてね。そこで本当に親切にされまして。栖霞(せいか)古寺という古いお寺で戦友がみんな親切にされて、非常に栄養状態もよく、割と早く復員できた。

だで、おやじが死ぬ前に、「お前がこうやっておれるのも、南京の中国で優しくしてもらったもんで、はよう帰れたんだわ」と言っていましたので。そのお礼で、南京に桜の木を 1,000 本、戦友の皆さんと送って。これは新聞にどえらい大きい記事で出ていますけれど、当時の。

そういうこともありますので、今日も言いましたけれど、南京事件は昭和 12 年です。ほんで、終戦は昭和 20 年です。8 年前のことですけれど、8 年前に虐殺があったようなところで、そんな優しくしてもらえないはずがないですよ。

ということで、僕は今日も中国共産党の方に言いましたけれど、わしは「南京の人に感謝しとるからこそ言うんだよ」と言って。真の日中友好を実現するために、「ええわ、ええわ」で済まされないと。やっぱり民族の誇りというのがあるんですよ。ということを申し上げました。

(記者)

一部報道では、南京の南京大虐殺記念館の館長が、でたらめの話と強く批判されておりました、不快感を表明されていますが。

(市長)

そりゃ、向こうはそう言うでしょう。いつ、今日？

(記者)

ええ。

(市長)

河村さんが言ったやつで。

(記者)

ええ。

(市長)

それは、そういう展示をしとる館長が「そのとおりだ」と言うわけにいかんじゃないですか。だから、いいんじゃないですか。そういう議論が巻き起こっていくということは。それは冷静に中国も受け止めないかんですよ。

(記者)

今市長がおっしゃった、「討論会で『こちら側の主張』、『日本人としての主張』をきちんと言わないかん」という、「日本人としての主張」というのは何を指すのですか。

(市長)

だから、南京において、先ほど言いましたように、不幸なことですけれど、通常の戦闘行為があつて。多くの方が亡くなられたことは事実ですね、市民が。だけど、いわゆる Nanking Massacre と英語で言うような、一般市民に対する、いわゆる虐殺行為はなかったということですね。

いろんな立場で言つとる人がおりますけれど、あれはどういう本だったかな。「戦闘詳報」といって、軍人が全部、各地方における戦闘状況を書くんですけれど、それが「うそだ」と言う人もいますけれど、結構これは命令文と分けて書いてあるんですよ。

だから、その南京での戦闘を全部分析した本があるんです。日本側からすれば。それぞれ。抽象的じゃなくて。ここでは、幕府山なら幕府山というところでどういう戦闘があつたかと。そういうことを言っていけばいいじゃないですか。1つずつ、1つずつ。抽象論ではいけません。

(記者)

それを日本人としての主張と言い切れる根拠というか。

(市長)

そう言うと申し訳ないけれど。日本人でも「あつた」と言う人もいますからね。特に、某新聞の関係の人を通じてこうなってきたんですけれど、だから、日本人というよりも、私が日本人であることということですね。

そういうことより、もっと客観的に冷静に見てみる必要があるんじゃないですかね。冷静に。それぞれの戦闘の状況の分析が大変いいですよ。いろんな戦闘行為があったのは、日本軍はみんな「戦闘詳報」で残していますから、全部。日記みたいなやつで。それで、どこでどういう戦闘があったかということ、きちっとやっていかないかんです。

しかし、これはどういうふうに考えたら非常に分かりやすいかといえますと、日本人は原爆のことを言いますわね。広島、長崎。これは、25万人は原爆被害者と言いますね。これが日本人の悲劇の1つの中核的なシンボルとして言いますが、これほどのことで、日本人が思っとる心理が25万人。南京で30万人ですから。ですから、日本人が思っているよりも、大変深刻な問題だということです。

◎名城住宅の跡地利用について

(記者)

中国の関係でいくと、昨日、名城住宅の跡地利用を考える集会で、市長も出席されましたが、今後、あの跡地については、移転の問題を含めてどのようにお考えなのでしょうか。

(市長)

あのときも言いましたけれど、まず1つは、ちょうど名古屋城の本物復元の話とも重なりますけれど、あそこは名古屋のシンボル、聖地ですので。ああいうすぐ隣において8,000平米もの巨大な領事館を造ることはぜひおやめいただきたいというのは、初め思っただけですわ。

ところが、滑った転んだがありまして、「地元の詳細を取ってくださいよ」というようなことになりまして。地元は地元で骨を折った方がおみえになりますけれど、そうやってやっとするうちに、いわゆる尖閣事件が勃発したわけです。ああいう状況下において、「そうですよ」なんて、「どうぞ」とはとても言えませんよ。尖閣の、この間の話ね。

そういうことで、申請を、ちょうど(昨年)3月11日ですから、大村さんと一緒に行ったんです。新幹線の中で震災があって止まった日ですから、ものすごい印象が鮮やかなんですけれど、そういうことで、優しく書いてありますけれど、「ご遠慮いただきたい」というのを財務大臣と外務大臣に持っていったんです。そういうようなふうで、ニュアンスとすると、「ご遠慮いただくようにします」ということだったんですよ。この際、明らかにしておきますと。

そんなところが、最近になりまして、また何か変な密約問題とかいう話が出まして。ちょっとまたもう一回調べますけれど、本当に北京における日本大使館の違法建築問題ですか、何かを解決するために、もし頭ごなしに、名古屋のこととか新潟のこともあるようですけれど、それが決められることなら、大抗議をせないかんですね。一体何をやっとするんだと、日本国政府は。本当なら、ですよ。だで、今ちょっとそちらの立場からもね。

「住民の了解が要る」というふうにおっしゃられたというのは、当時の、あれは財務、民主党のある政務官さんが担当していましたので、「それはきちっと条件に付けますから」と。これでやっとして、仮に密約があって「どうぞ」と言ったら、自分のところも矛盾ですよ。契約不履行というのかね。裏切りになってしまいますよね、そんなことをやったら。

だから、中国の皆さんにはぜひ。今日も共産党の幹部の方に言われましたけれど、まず、「日本人は漢字を使っとするじゃないですか」と言って。歴史的に見れば、あまり言うのも悔しいですけど、やっぱり中国が兄貴でありね。遣唐使の、遣隋使のころからいえば。

聖徳太子が盛んに「日出ずる処の天子、書を日没する処の天子に致す」ということでいろいろ言いましたけれど、やっぱり中国が兄貴であり、日本が弟であったということは、一応言わざるを得ないというか、そうだと思いますね。文明のところからいって。だから、大きい気持ちを持ってもらわないかんです、中国にも。

一番の証拠が漢字を使っとするということなので。それから歴史のいろんな、非常につらい歴史が日中間にありました。大陸とどうやって付き合っていくか、日本との歴史的な大問題だったから、ありましたけれど、ほんだで、中国にはぜひ大きい気持ちになっていたいて。

ここまで名古屋で問題になる、それから尖閣問題があったという状況の中では、ぜひご遠慮いただきたいと。名古屋城のすぐ隣に8,000平米の中国領事館を造られるのは。というのは、私、正直に思いますよ。日中、中日友好のためにですわ。

2月27日(月曜日)の会見

(抜粋)

◎「いわゆる南京事件」を巡る一連の報道について

では、いわゆる南京事件についてです。

「『いわゆる南京事件』を巡る一連の報道について」ということで、外国との関係もありますので、慎重を期すというか正確を期すために、これは私自身が心を込めて書いたものです。

ちょっと長くなりましたけれど、はしょらんように書いてまいりました。従いまして、ちょっと長くなりますが、丁寧に、文章に従ってお話をさせていただきたいと思えます。

平成24年2月27日(月曜日)、いわゆる南京事件を巡る一連の報道についてと。名古屋市長 河村たかし。

去る2月20日(月曜日)に本市を訪問された中国共産党南京市委員会の皆さまの表敬に際して、「私の父親および戦友が終戦時、南京で大変お世話になり、その御礼および日中友好の証しとして栖霞(せいか)古寺に桜の木1,000本を送ったこと」、「南京の皆さまの温かいおもてなしにより、元気に早く日本へ帰れたので私が生まれたと亡き父が語っていたこと」、「南京の皆さまに感謝していること」、「日本は漢字を使っており、歴史的には中国が兄、日本が弟であるので、大きな心でお願いしたい」など、南京市への感謝を十分にお話しいたしました。

そこで、「いわゆる南京事件はなかったのではないか」とも申し上げましたが、その経緯は以下のとおりです。

昨年8月、駐名古屋中国総領事に、南京事件について話し合いの機会を作っていただきたいと申し入れをしました。そして、表敬の10日ほど前の2月7日(火曜日)から9日(木曜日)まで、藤沢、山本両名古屋市会議員が南京市を訪ね、南京事件について話し合いをしたいと申し込んだところ、話し合うことは良いことだとの返事をいただいたとの報告を両議員からもらっていたことも、私が話し合いをしたいとの希望を率直に言うことができる土台となりました。

表敬の場には通常、議員の立ち会いはほとんどないが、藤沢、山本両議員も南京市訪問時の感謝の意を述べたいとの意向で同席していた。南京市委員会の皆さまとは、記念品の交換を行うなど、終始友好的に話が進んでいました。

しかし、私の「いわゆる南京事件はなかったのではないか」という発言が、メディア、報道により「南京大虐殺はなかったとする持論を展開」とのテロップになり、私の発言の趣旨が南京ではあたかも何もなかったと誤解され、同時に使節団との記念品の交換や歓談している場面が切り取られ、クローズアップされた。それにより、南京使節団の皆さまが、「なぜ反論しなかった」などと批判を浴びたと聞いています。

しかし、表敬は極めて友好的に進んでおり、誤解されたとする、南京市使節団には責任はなく、遺憾であります。また、南京市民の皆さまにも、そのような誤解があったと理解をしていただきたいと思います。

いわゆる南京事件に関しては、平成 22 年 1 月に公表された執筆者個人の意見とされる日中歴史共同研究報告書においても、犠牲者数や虐殺（不法殺害）の定義などにおいて、両国の意見の相違があるとされております。

「いわゆる南京事件というのとはなかったんじゃないか」と、私があえて「いわゆる」と南京事件を申し上げたのは、象徴的に 30 万人とされるような組織的な大虐殺はなかったのではないかと趣旨で申し上げたものです。

また、日本では通常そのような意味で「いわゆる南京事件」は捉えられております。

しかし、友好使節団に面と向かって、30 万人の大虐殺と申し上げることは、言葉がいかにも残虐でありますので、あえて「いわゆる南京事件」と申し上げたものです。

一部報道において、相互理解と友好親善を一層深めるために南京市と名古屋市で率直な意見交換、話し合いをしたいという私の真意が伝わらなかったとすれば、遺憾に思います。また、伝わらなかったことによりまして、民間の皆さまに影響が及ぶことがあってはならないし、南京の皆さまにもぜひそのようにお願いをしたいと思います。

南京市、名古屋市は、34 年間友好都市関係を続けております。しかし、誠に残念ながら、交流の状態は以下の数字にとどまっています。

人口が約 4 倍の上海市に対し、南京市での在留邦人数は 80 分の 1、名古屋市からの進出拠点数はわずかに 2 件で、上海の 159 件に対し 80 分の 1にとどまっております。人口で修正しても、南京市

への交流実績は、上海市への 20 分の 1 という、極めて少ない数字となっておりま

す。何とか形式的な交流促進ではなく、もっと多くの日本人、名古屋市民が南京市に住んでもらえる、観光に行ってもらえるように、その障害となっている「ノドのトゲを抜こう」との気持ちで申し上げたところ

です。亡き母が生前、(南京への桜の木千本の植樹のときだと思いますが、)「南京へは行きたくにゃあ」と言っていたのも、はっきり記憶しております。これも、「トゲを抜こう」と思った理由の 1 つとな

っております。中国四大古都の南京市、そして名古屋市の友好都市関係について、将来に向かってより発展するように努力していきたいと考えておりますので、両市の市民の皆さまにもご理解いただくようお願いしたいと思

います。30 万人もの非武装の中国市民を日本軍が大虐殺したとされる「いわゆる南京事件」について、私は 30 万人もの非武装の中国市民を日本軍が大虐殺したことはないと思っており、「いわゆる南京事件はなかったのではない

か」と申し上げたことは撤回しません。しかしながら、いろいろな意見、立場があることは理解しており、率直な議論ができる日が 1 日でも早く来るよう、そして日中友好関係が本当に進むよう、心から願っております。率直な意見交換、話し合いを

したいと申し上げておるのが私の真意です。

質疑応答

◎「いわゆる南京事件」を巡る一連の報道について (その 1)

(記者)

今回の一連の事態は、今回のマスコミの一連の報道のためであるという解釈でよろしいですか。市長の認識としては、マスコミの報道が切り取られたものだったから、こういう事態になったという説明

ですか。

(市長)

マスコミの報道さんだけとかどうかということではなくて、少なくとも、ここに書いてあるとおりでして、私の「いわゆる南京事件はなかったのではないか」という発言が、私の聞いたところでは、「南京ではあ

ないし、私が、普通の場合は、いろんなどころでは「30万人大虐殺」とかそういう言葉を使うんですけど、やっぱり友好使節団の方がおる面と向かって「30万人の大虐殺」と言わないかんですからね。だから、そのことは私が本当に配慮いたしまして、歴史的な用語ですよ、「南京事件」という、「いわゆる南京事件」という言葉を使ったということが、その理由は理由でしょうね。

しかし、何べんも繰り返しますけれど、私は「いわゆる」とわざと使っていて、これは全部テレビ局が撮影しておりますし、ICレコーダーでも取られておりますので、ぜひ何かの機会に全部公開して、皆さんが分かるようになっていただくことを望んでおります。

「いわゆる」と言いますけれど、南京事件のときに、何回言ったか分かりませんが、全会話を「いわゆる」を付けたかどうかは記憶がありません。これは申し訳ないけれど。いろんな言葉の中で、「いわゆる南京事件」ということで、象徴的に何回か言えば、普通の場合はそれで、大体1回言えばいいので。全部言ったかどうかは記憶がないので、それは僕はIC（レコーダ）で取っていなかったもので、一度出していただくと、大変市民の皆さまも分かっていただけるのではないかと。

しかし、少なくとも、「いわゆる南京事件」と冒頭か何かのときに言った記憶はあります。「いわゆる」と必ず付けてですね。

（記者）

資料を読ませていただきましたが、「いわゆる30万人の大虐殺はなかったのではないかと書いていますが、市長のご自身の意見はさっきお伺いしたのですが、南京の虐殺があったのかなかったのか、どのようにお考えですか。

（市長）

僕がここに書いてあるように、いわゆる30万人の非武装の中国の皆さんを日本軍が大虐殺したということはないと、私は思っております。

（記者）

犠牲者数に関してはどうにお考えですか。

（市長）

それは非常に多くの意見等がありまして。それこそ、ぜひ率直に話し合おうではないかということをお願いとるところです。そのときにいろいろお話ししたいと思います。

（記者）

今回の件に関しては、市長の発言に対して藤村官房長官が、「名古屋市と南京市の間で解決されるべきだ」と発言しておりまして、市長として、今後南京市側に対して何らかの誠意のある対応をしていく予定はあるのかどうか。あれば具体的な対応を教えてください。

(市長)

南京市とは、言っていないかどうか分かりませんが、役所の中では今でもアプローチしておるようでして。あと総領事館の皆さん、そして中国の大使館にも、私の真意ですね。それと、本当に親の関係で。

だから、思ったのは、うちのおやじが終戦のときに大変に世話になった、それだけの理由で「ない」と言っとるわけじゃないですよ、いわゆる 30 万人の大虐殺がね。それはそれでまた別に勉強しとるんですけれど、おやじが大変に南京の皆さんにお世話になって感謝しとると。「おみやあが生まれたのも、南京の人に本当に優しくしてもらったおかげやぞ」と。

桜の木も 1,000 本送って、僕も行ってきました。そういうような気持ちをぜひ大使館の人にもお伝えしたいということで、今日指示しました。領事館経由ですけど、大使館の皆さんに伝えてほしいと。「ぜひ出向きますから」ということで指示したところです。

(記者)

もう 1 つ聞かせてください。今回の発言は撤回しないと書いてありますが、ホストを尊重して反論しにくい立場のゲストに対して、今回極めて敏感な話題を市長の方から呼び掛けたわけなのですが、これは礼儀の国と誇る国の市長として不適切ではなかったのか、お考えをお伺いしたいと思います。もし不適切であるとお考えであれば、普通だとその発言を撤回するのがマナーだと思うのですが、いかがでしょうか。

(市長)

ちょうどここにも議員さんがおみえになりますけれど、10 日ほど前に（議員が）南京市に行ったりしまして、向こうから「話し合うことは良いことだ」との返事ももらって。議員さんもおみえになりましたし、そのときに。

それと、大方というかほとんどは、本当に、ぜひ IC（レコーダ）を聞いていただくといいんですけど、ほとんどは「ありがとう」ということで、「感謝しとるから言うんですよ」ということも話をしておりますし。

それから、歴史的に見れば、遣隋使や遣唐使の話もしたような気がしますが、そのことからすれば中国は兄貴の国で、私どもは弟の国だから、大きな心でお願いしたいと。そういうことをほとんど言っとるのであって、私からすれば大変遺憾であるということ。

終始、そのときにけんかになったかといったら、それはぜんぜん違っていきまして、友好的に話が進んでおりましたので、非常に遺憾に思っとるということです。

ほんで、南京市の使節団の皆さんが、そういうことで、「何でそのときに反論しなかったんだ」と言われたようですけれど、それについては南京市の皆さまには、使節団の皆さまは責任がありませんので、その点については皆さんもぜひ、そういうふうでお願いしたいという気持ちです。

(記者)

その場でこの発言をされたのは適切だったということでしょうか。

(市長)

適切と断言できるか知りませんが、ずっと流れの中で、決して突然違和感がある発言ではなかったと思います。

(記者)

確認で、今後の動きというのは、大使館の方に行かれるとか、何か決まっていることはありますか。

(市長)

その返事がどうなるかですけれど、今国際交流課（の職員）に、こちらの総領事さんにアプローチを取って、総領事さんとできたらお会いするなり。今言ったとおりです、大使館にフォローしてください。それはちょっと今日ですから、返事はありませんので。

(記者)

アプローチを今日掛けたということですか。

(市長)

今日指示しまして。まだ行動は起きていないのかどうかですけれど。まだですか。

(当局：ええ。)

(市長)

まだしておりませんが、早速したいと思います。

(記者)

それで、回答待ちということですか。

(市長)

今日中にぜひ、大至急お願いしたいと思います。

(記者)

政府の見解で、「多くの非戦闘員の殺害や略奪行為などがあったことは否定できない。しかし、被害者の具体的な人数については諸説あり、政府としてどれが正しい数かを認定することは困難」という見解があるのですが、この辺は市長のお考えに沿うものなのでしょうか。

(市長)

僕の考えに沿うというか、それも非常に不明確な話で、「虐殺はあったのですか」という問いに対して、「虐殺」という言葉を使わずに、どう言いましたかね。「略奪」ともう1つどういう言葉でしたか。「虐殺」を使っていないんですよ、日本側は。

(記者)

「略奪行為」。

(市長)

と、もう1つ。

(記者)

「多くの非戦闘員の殺害や略奪行為などが」。

(市長)

「非戦闘員の殺害」と言っているのです。虐殺があったとかという問いに対して「非戦闘員の殺害と略奪行為があったということは否定できない」と言っているのです。

そもそも「虐殺」という言葉の定義が別にありませんので、その視野がどの程度、どういうものを意味しているかは、一義的ではないですよ。

(記者)

では、「虐殺は全くない」という立場ではない、ということですか。

(市長)

「虐殺」という言葉が、1人、2人でも対応によってそうなるのか、それとも一定の数をイメージせないかんのかについては、はっきりしないんです。それは、共同研究の中でも発表していますよね。だから、その質問にこうやって答えるというのは、なかなか苦しいんです。

(記者)

では、非戦闘員が亡くなられた事実はあるけれども、そこに軍が主体的に、組織的に関与したとまでは言えない、というお話ですか。

(市長)

いや、確実なのは、私どもでもいろいろ勉強というか、いろんな情報というか、やってきましたけれど、南京大虐殺、いわゆるね。南京事件と言ったら、それは30万人の非武装の中国の人を日本軍が大虐殺したということは間違いありませんよ。そういう情報であるということは。それはないということが言えるので。

私も冒頭から、そのときにおいても、いわゆる戦闘行為ですね。言い方は戦闘行為でも戦争でもいいんです。そういうことがあったから、非常に残念なことはあったのかもしれないというか、あったのでしょ。それは否定していませんよ、そのころから。

(記者)

その残念なことというのは、非戦闘員が殺害されてしまったということですか。

(市長)

その対応はどうであったのか、そこはそれこそいろんな立場がありますよ。それはあったのでしょ、やっぱり。

だけど、それは幕府山事件だとかいろいろあるんですよ、戦闘がそれぞれ。放火事件があった幕府山事件についても、どういう対応であったかについては、そこで市民の方が亡くなっておりますけれど。揚子江を、南から船で送ろうと思ったところを、銃撃戦になってしまって、本当の中国の方が、市民が亡くなったということについても、いろんな、その対応についても議論があるところです。

(記者)

結局、非戦闘員が日本軍によって殺害されてしまったことを捉えて、市長はそれを虐殺とは捉えていないのですか。

(市長)

その定義は、そういうことを率直にお話ししようじゃないですか、ということではないですか。少なくともあるのは、「虐殺」という言葉でなかったんですよ、言えることは。「南京大虐殺」と。歴史的に教科書で言えば「南京事件」です、いわゆる。ずっと出てきたのは。

あまり言うてはいかんけれど、私も行きましたけれど、南京大虐殺記念館に。そこには、いろんな文章の中にありますけれど、そうではなくて、いわゆる「30万人」と明らかに書いてありました。「30万人」という数字が。書いてあるというより、ぱっと見るとそちらが目に入るというぐらいの。

そういうものを、「いわゆる南京事件」と言うということです。問題はそれなんですよね。それは僕はなかったと思います。そのことについては発言を撤回することはできません。

(記者)

市長の今回のこのコメントを読んでいると、「いわゆる南京事件はなかったのではないか」という言葉が独り歩きしてしまったという印象を持ったのですが、市長がかねがね、「南京大虐殺、いわゆる南京大虐殺の犠牲者の数に疑問がある」という主張は、前から議会でもおっしゃっていましたが、それはわれわれマスメディアも理解していたと思うのです。

ただ、昨年12月に南京の副市長が来たときは「日中間にいろんな問題がある」という程度にとどめていた言い方を、「南京事件はなかったのではないか」と具体的にあえて言及したことが、今回の問題ではないかと思うのです。メディアのいる前で、相手もいる前で。

やっぱりその言葉が、メディアということをして市長がご理解していらっしゃるって、あの中での発言だったということが僕は問題ではないかと思うのですが。言葉が独り歩きすることもあるという、それを踏まえてなぜあの発言をされたのかが私などは疑問に感じるのですが、それでもやっぱりあの発言に問題はなかったと。

(市長)

先ほど言いましたように、総領事に行ってからでしたかね、副市長さんがみえたのは。いつごろだったな。

(記者)

昨年の12月に副市長さんが。

(市長)

昨年の12月でしたかね。そのときもそうですけれど、ひとつ率直に議論をしようではないか、という流れで話をしていましたのでね。ほんで、ちょうど10日前でしたので、別に市議員さんにあれするわけじゃないですけど、報告もいただいて。

ちょうど南京の、だけどそれは違う人だったんですけど、みえましたので、率直に。だけど、「いわゆる南京事件についてはなかったのではないか」ということは、私も今も思っていますよ。そのことは、なかったのではないかと。

だから、僕とすれば分かってもらいたいということで、わざわざ「いわゆる」という言葉を付けたんですけどね。よく文章にも書くときもありますけれど、「いわゆる」は。そういう気持ちです。

そのときに、「本当に 30 万人南京大虐殺はなかったのではないのでしょうか」というふうに言ったらよかったのかなと。反対にそういうふうに思いますわね。今でも。だけど、それは言えないですよ、やっぱり。当の日本軍が、大虐殺をしたとされている中国の方が来とる目の前で、「30 万人大虐殺が」という言葉は、やっぱりあまりにも残酷で使わないと。

(記者)

そもそもあの場が、特に問題提起をする場ではなかったのではないかなとも思うのですが。

(市長)

いや、だけど、ほとんどは。

(記者)

もちろん友好ムードではありました。確かに。

(市長)

ほとんどは、ご承知のように、僕は本当に「ありがとう」ということを何べんも言って、多分喜んでいただいたのではないかと。個人的な体験というのは大きいですから。おやじが本当に「南京の皆さんのおかげで、おみやあは生まれたんだぞ」と言っていましたので。そのことを素直に話をさせていただいて、喜んでいただいたのではないかというふうに。

その文脈の中で、それだけが論理的理由ではないんだけど、「いわゆる南京事件というのとはなかったのではないかと思います」というふうに言ったということで、それだけぽっと取り上げて、その議論だけしとったということは全く違いますので。

(記者)

私もそれは聞いていました。

(市長)

録音もありますし、本当に VTR もありますので。

(記者)

1つ確認させてください。言葉がいかにも残虐であるので、あえて「大虐殺」を使わなかったとのことですが、市長が、ご自身の見解はそもそも「虐殺」と認識していないから、「虐殺」という言葉を使わなかったのではないかとと思われるのですが、いかがですか。

(市長)

それはありません。それは全く。南京のことについては、大虐殺ということは一つのセットのような言葉でありまして、そんなつもりではありませんよ。

(記者)

では、虐殺はあったとのご見解でよろしいでしょうか。

(市長)

あったかなかったかは、今の虐殺の定義がないものですから。そのことになってきますと、人数になっていくでしょう。少なけりゃええというものではないでしょう、中国の皆さんも。そういうものではないと思うんですよ。だから、そういうことをそれこそ率直に南京の皆さんと議論しましょう、ということ。

それはいろいろ言われるか分からんけれど、中国の使節団の方の目の前で「30 万人大虐殺が」ということは、なかなかちょっと言わないものですよ、やっぱり。日本人が中国の市民を虐殺したかというところで、中国人の人が来ているときにね。

私は、商売をやってきたこともあるか分かりませんが、やっぱり直感的にそう思いましたね。だから、優しい言葉で。歴史的な用語ですけど、「南京事件」という、そちらの方で。しかし、「いわゆる」ということを付けて。

何人ではありませんよ。「小さければええ」と僕は言っておりません。だけど、いろんな悲しい事態はあったと思いますけれど、「いわゆる」というのは、日本の方ならもうほとんどどういう意味か分かると思います。

それは、30 万人にも及ぶ、いわゆる非武装の中国の皆さんを日本軍が虐殺した、殺害したということ。「いわゆる南京事件」と。南京事件がそうなんですけれど、わざと「いわゆる」まで付けたんですね。そういう気持ちだったということです。

確かに今ちょっと記者さんも言われたけれど、ほとんどは「ありがとう」という話で終始しております。

(記者)

市長ご自身は、虐殺と言え、どれぐらいの犠牲者数があれば虐殺というように。

(市長)

これは少なくとも虐殺はあり得るでしょう。対応によってぜんぜん違うじゃないですか。少なくともね。リンチ殺人みたいなものがあれば、それは虐殺でしょう、やっぱり、1 人であっても。と思いますよ。

だから、そういう問題ではないんですね。だからやっぱりフランクに議論するようにしないと。

僕がここに書いてありますように、本当に、南京に、うちのおふくろも「行きたくない」と言っていましたわ。名古屋で言うと「おそぎゃあ」と言いますけれど、「みんなに恨まれとるのではないか」ということで。

交流も30何年間続いておりますけれど、ここにありますように、非常にやっぱり、34年間続いておりますけれど、上海と比べて人口割にしても20分の1しか行っていないという状況を、じっとしとって。ええですよ、そりゃあ、南京との友好都市だと言っただけで。

だけどそれでは、多くの税金を使っていますし、せつかく当事者になったのだから、それを何とかここでトゲを抜きたいと。これを本当に。このまま封印しとってもうまくいかないのだ、ということを私は申し上げている。

だから、どっちがええか悪いかというよりも、まずいっぺん。今回もそうなんだけれど、こうなったことが、私が一番最初「30万人大虐殺」と言えばよかったか分からんけれど、言わなかったために、「いわゆる南京事件」と言ったためになのか分かりませんけれどね。

それがマスコミの方へ行ったのだと思いますけれど、これでこうなってしまう。この度ごとに民間の交流がストップするようなことは避けてもらいたい、本当に。だで、もっとフランクにこういうことが、意見が率直に言えるような時代を1日も早くつくっていきたいというのが、私の心からの願いです。

(記者)

歴史的な史実に関して、人数も含めてなのですが、日中共同研究がありますが、それは別として、市長は独自に、議論、討論会なりで史実を追究していきたい。そういう意向があるのですか。

(市長)

日中共同研究につきましては、あの中に文書がありますけれど、あれは個人的な見解ということになっております。別に各国の、代表して、それをまとめた見解にはなっていないんですわ。

ですから、それもありますし、やっぱり友好都市であれば、南京大虐殺記念館が現にある南京市であれば、当事者がもっとフランクに。フランクと言うと悪いけれど、率直に話し合うという姿勢は重要なんじゃないの、と思いますよ。

市民の皆さんも、あまり言うといかんけれど、こういう状況で、30万人日本軍が南京の皆さんを大虐殺したところへ本当に行ける

かと。今行っておられる方がおられますので、大変に勇気のある方で理解のある方でありますので、あまりそうは言えんけれども。もっと普通の名古屋の人たち、日本の皆さんが、温かい気持ちで旅行に行ったり、向こうで住んだりできるようにということで、必要なんじゃないんですか。このトゲを抜くことは。

トゲを抜くということは、どっちの史実に当てはまるどのこのよりも、まずいっぺん話し合っていくということが、非常に僕は大事だと思いますよ。「話し合うこともいかん」と言われると困っちゃいますね。

(記者)

市長が話し合われるというのは、虐殺行為そのものがあつたかなかつたかのところから始める議論、ということでよろしいのですか。

(市長)

本当にずっとお話ししていくのだったら、例えば幕府山事件でどういふことがあつたとか、誰々の日記にはこう書いてあつたとか、いろいろあるわけです。挾江門（ゆうこうもん）というのがありますけれど、あそこで多くの死者が見つかっていますけれど、これは一体どういふことだつたのだろうかとか、いろいろあるんです。そういうことを率直に話をしながらやっていくと。

(記者)

いろいろあるというのは分かるのですが、そういう行為そのものがあつたかなかつたかという、その前提の部分もなくして最初から議論をしたいという。

(市長)

議論というより、やっぱりあれじゃないですか。私は思うんですけど、この私ども日本人が、少なくとも中国大陸で30万人の中国人の一般市民を虐殺したと言われとるわけですよ。それに対して、友好都市であるこの名古屋が、やっぱり「ちょっと待ってよ」と。「それは本当なの」といふことを、素直に当事者の方に話し掛けるというのは必要なんじゃないの。

(記者)

人数のことといふのは、そもそも幅はあるではないですか。だけど、その行為そのもの自体があつたかなかつたかといふところから、市長は議論を始めたいとおっしゃるのですか。

(市長)

それはまず話し合う。どういう順番になるか分からないけれど、話し合いつてそういうものじゃないですか、まず。私はそう思うんですよ、本当に。

30万人というと、あまり原爆と比較してはいけないけれど、大変なことですよ。日本人の犯したことは。これがもし本当だったら、大変なことですよ。

(記者)

市長がその30万人という数字にこだわっていらっしゃるのは分かるのですが、でも、今は、問題はそもそもそういった南京事件そのものがあつたかなかつたのか、という部分になってしまっているではないですか。そういう意味でいくと、先ほど質問にもありましたが、市長自体は、そういった行為はあつたのかなかつたのか、というのはどのようにお考えなのですか。

(市長)

だから僕は、少なくとも、何べんも言いますけれど、30万人の、よく言われるのはそれでじゃないですか。日本でいわゆる南京事件と言われればこれですよ、ぱっと出てくるのは。

現に南京大虐殺記念館にはそのようにぱーっと表示してありますから。これは私も見てきましたけれど。だから、そういうような30万人にも及ぶ、いわゆる中国の皆さんの、一般の市民の皆さんを日本軍が大虐殺したということがあるかないかという問題なんです。

あと、それからにつきましては、いろんな説があります。いろんな説があります。戦闘行為ですので、いいことではないけれど、残念なことも多くあつただろうと思います。

(記者)

今回の中国側の反応というのは、市長はどう感じられていますか。交流停止という。

(市長)

僕は残念ですね。

(記者)

先ほどの話し合い、率直な意見交換という話をしていきたいというところからですと、ちょっと過剰反応かなというような。

(市長)

使節団の方に迷惑を掛けてはいかんのですね。これはあれですけど、大変友好的だったんですよ、話が。だから、相当僕も面食らいました。

だけど、今自分で文章を書きながら思ったのは、やっぱり「30万人大虐殺」という表現を使わなかったために。さらっとしているじゃないですか、「いわゆる南京事件」というのは。歴史上の用語ですけれどね、世界史なんかで学ぶ場合に。

それだったから、一切、それこそ何もなかったというふうに、南京ですね。そういうふうに下手して取られたのではないかな、という感じがしましたけれど、僕は僕なりに相当気を使って。友好使節団だしね。

現に日本人が30万人中国の人を虐殺したと、いわゆるその当事者の子孫が来ているわけでしょう。その方に「30万人大虐殺が」という言葉を、やっぱり僕としては使いたくないということがあって、柔らかく、気を使って、「いわゆる南京事件」。だけどそれだとちょっとさらっと行っちゃうから、「いわゆる」というのを付けたということです。

(記者)

10日ぐらい前に市議の方たちが行って、向こうは「話し合いはいいですよ」と言ったのを、市長は公的な南京市の見解だと思われていたと。

(市長)

公的というより、聞いていただくといいんですけど、(市議の)藤沢さんと山本さんにね。

(記者)

市長が南京市と、市議の方が持ち帰ってきた話を公のものと捉えたのかどうかというところを、今。

(市長)

公といって、市のいわゆる公文書といいますか、市が何か議決して、市の確定的な意思とは思っておりません。

(記者)

思っていない。

(市長)

ただ、そういうところまでは行っていないけれど、市会の、議長さんをやられた方だったな。友好協会の名誉会長さんですから、それと市議会の議長をやられた方だと言ったね。

かつて、そういう方ですので、一つの南京の、一つの公的に近い意見だと思っていました。

(記者)

それを踏まえた表敬だということを確認していたのか、いなかったのかということはどうでしょうか。そういった意見を、その友好協会の名誉会長だとか、かつての議長がそうやって言ったことを踏まえての表敬だと思われていたかどうか。

(市長)

そう思っていました。

(記者)

踏まえての。

(市長)

ええ。

(記者)

だから話しても大丈夫だろうと。

(市長)

まあそういうことですよ。

(記者)

そこ、確認はちゃんとしたのですか。

(市長)

確認というか、10日前ですし、そう思っていました。

(記者)

そこを確認しなかったことは問題だと思いませんか。

(市長)

どうですかね。しかし、私はそのことについて議論をぶっ掛けたというものではありませんしね。そのことを。

私は(父)親が世話になったので、その体験から言うと、「いわゆる南京、30万人も殺したようなことはなかったと思いますよ」ということを言ったら、その文脈はいかんのですかね。

主眼は、おやじが世話になった、感謝のラーメンを作ったり、作り方を教えてもらったり、野菜をもらったりと言ったら、ものすごいにこにこ笑い顔があったでね。そういうことがあるので、その文脈の中で。栖霞(せいか)古寺という南京の近郊のお寺ですけど。

(記者)

市長にとっては文脈なのですが、表敬団にとっては、友好協会の会長だとかが「話し合いはいいですよ」と言ったことは踏まえて来ていないので、前提が違うスタートではないですか。

(市長)

それは総領事さんにも去年の夏にお話しておりまして、突然ではないですから。私の信書も、僕の書いた紙も南京市長宛てに出していますからね。行かれたときに。

ですから、当然と言っては申し訳ないですけど、一種の何か話し合いが行われるのかなというコンセンサスはあったらうけれど、話し合いじゃないですよ。私は「来てもらってありがとう」といって、「感謝しておりますよ」ということの中で、そう申し上げたと。おやじの体験談の中で、そう言うのはいかんのですかね。

(記者)

市長の今日のお話ですと、30万人もの非武装の中国市民を日本軍が大虐殺したことはないと思っていて、30万人未満の虐殺があったかどうかについては、いろいろな説があるということですね。

それで、市長ご自身は、その犠牲者数について、現時点で確たる見解はお持ちではないのですか。

(市長)

いろんな勉強をしてきまして。しっからは分かりませんね。最低限のところは分かりません。いろんな立場があつて。

共同研究の中では、2万人から20万人となっていますけれど、あれも別に、先ほども言いましたように統一見解というわけではない、個人的な見解と断っていますので。そういうことを率直に話ができる時代が1日でも早く来るようにと。中国と日本の間にね。

(記者)

先ほどの質疑では、そういう率直に話し合うというときになったら申し上げたいとおっしゃっていましたが。

(市長)

その中で申し上げるといふか、何人というふういきちつと話できないと思いますよ、多分。いろんな何人という説がたくさんありますけれど。

(記者)

でも、市長が「南京に行ってそういう話をしてもいい」とおっしゃっている立場からすると、市長の意見を何か言わないと。

(市長)

それは、典型的に今、幕府山事件とか、いろんな戦闘状況のところがあるわけですよ。「そこについてはこういうふうに言われていますよ」と。「僕はこう思いますよ」と。「こういうことがあったけれどこうなのではないですか」と、こういうような話ですね。

(記者)

つまり、犠牲者数については、市長としてはこうだというのはない状況で、この議論に臨もうという。

(市長)

いや、僕は僕なりに分かるといえるか、勉強はしています。

一番よくあるのは、セーフティーゾーン、安全区の中で、12月の初めに20万人であったのが1カ月後に25万人と人口が増えていると。セーフティーゾーンの中でね。これは何なんだという話ですわね。だけど、南京城郊外でもいろんな戦闘がありますから、それだけが全てではないけれどね。

(記者)

犠牲者数の話ばかりで恐縮ですが、多くともどれぐらいとか。今、これまで勉強されてきた中で。

(市長)

あまりそれは言わない方がいいんじゃないですか。ちょっと今、これは市長のあれになっていますので。

(記者)

もう1つ、誤解されたということを強調されていますが、誤解した主体は誰のことを指しておっしゃっているのですか。

(市長)

僕もよく分からないけれど、使節団が足止めを食らっているという話はびっくりしたんですわ、初め。その内容はちょっと分かりませんけれど。本国へ帰れずにね。それは聞いてびっくりしまして。「何で抗議しない。何でそんな握手か何かしてにこやかにしとるんだ」というお話が中国の方であったと聞きましたので、おかしいなという感じなんですね。

ほんで、夜ずっとネットを見ておりました、某テレビ局のニュースがぱっと出ましたので、それによりますと、今書いてあるようなテロップだったですね。正確に一応書きましたけれど、「南京大虐殺はなかったとする持論を展開」と。

全部の番組を見ませんので、1つ見たのが、当日出たのがこれですね。「南京大虐殺はなかったとする持論を展開」とのテロップになったと。これが、確かにこれはなかったのですから、全くなしというふうに取れるのか、僕も確証はないですけど。

(記者)

つまり、「非武装の市民の殺りく行為が1人もなかったのだ」という主張だと誤解された、というように。

(市長)

そう思った、そのテレビを見られた方ですけど、見られたとすると、それは誤解ですね。それは私は前から、いわゆる戦闘行為に伴う残念なことはあったのだと。それは日本軍の当時の大将も謝罪していますからね。

(記者)

今日市長がこの場で解こうと思っている誤解というのは、どういう誤解なのかということ、あらためてご説明願いたいのですが。

(市長)

今一番中核は、端的に言えば、「1人もそういう悲しいことがなかった」ということを私は言ったわけではないということです。

それはかねがねそう言っていますから、皆さんご承知だと思えます。市議会の本会議でも答弁していますし、それはかねがね言っていることです。

そのテレビ番組のやり方が悪かったと言っただけではないんですよ。これも一つの報道の仕方なんですね。「南京大虐殺はなかったとする持論を展開」と。「南京大虐殺はなかったとする持論」というのは正しいかどうかちょっと分かりませんが、ちょっと微妙ですけど。

(記者)

あの日、2月20日(月曜日)の表敬訪問のときに、市長はもともと当局が準備した文書か何かが手元にあったと思うのですが、「それもありますけれど」と切り出した上で、この話をされた。

(市長)

この話より、それは主に、おやじが世話になって本当に。ぜひICレコーダーを出してほしいんですよ。「世話になって本当に感謝しています」という話をした方が喜んでくれるよとあって、体験談だから。

ほんで、実に、桜の木1,000本を植えていますからね。僕も行きましたし、うちのおふくろも行きましたし、戦友も行きました、みんな。そういう話をした方が絶対喜んでくれるからとあって、ああいうものを読まずに話をして。

だけど、そこまで本当に優しくしてくれた南京の人たちが、8年前ですけど、30万人もの、日本軍が自分たちを卑しめたとかあやめた人たちを、これほど優しくしてくれるか、ということ、私は思っていますけれど。だから、「いわゆる南京事件というのはなかったんじゃないかと思えますよ」と。そういう話です。

(記者)

あえて伺いますが、その「なかったんじゃないか」と市長がおっしゃるところまで含めて、その話をすることが喜んでもらえると思っていた？

(市長)

そこを、あの話のときに確定的に認識があったかどうかは分かりません。ざっと話をしとる中で。よく話をしますから、私はそういうときに。

(記者)

あの使節団の場で南京事件の話に触れることは、非礼になるということは。

(市長)

思いませんでした。だから、それに気を使って、「30万人大虐殺」という言葉を使わなかったと。せめてものね。私は、そういう「大虐殺」という言葉を使わずに、親が大変世話になったので、お互いに喉の奥のトゲのようなものである、30万人中国の皆さんを大虐殺したようなことはなかったと思いますよと。だからフレンドリーにやりましようや、という気持ちなんですけれどね。

(記者)

あと1つ、この間の政治塾の後の記者団に対するお話の中で、「市民の生活を守るのが市長の絶対的な責任である」ということをおっしゃっていましたが、あれはどういう意味でおっしゃっていたのですか。

(市長)

報道によりますとですけど、私は直接まだ聞いておりませんが、観光客を名古屋に行かんようにするとか、その他のイベントを中止するとか、ああいう話は漏れ伝わってくるじゃないですか。

となると私も、市長というのは、いろんな理念もありますけれど、やっぱり市民の皆さんの生活を守るというのは、これは絶対的な責任ですからね。そういうことはやめていただきたいと。

冒頭、かかってきた電話にも「民間交流は妨げるものではない」ということは言っていたとすると、私は信じていますけれど。

(記者)

市長自身、この混乱した事態について責任は感じておられるのですか。

(市長)

責任というか。あまり適切なお質問ではないですけど、残念だということで、早く誤解を解いて。

状況なんかを考えて、めちゃくちゃしょっちゅう討論をするものじゃありませんけれど、1日も早く、「何かこのことを言ったら、すぐこんなふうになっちゃう」という時代を打ち破って行って、本当の日中友好というか、南京と名古屋の交流が早く実のなるものにね。上海の20分の1では本当にいかんじゃないですか、ならんかしらんと思っとるということです。

(記者)

認識のずれがきつとあると思うのですが、例えば、誰かしらに対して謝罪とか陳謝するようなことというのは。

(市長)

今日は私、自分の気持ちを精いっぱい、本当に僕が書いた文章ですから。こういうことです。

◎「いわゆる南京事件」を巡る一連の報道について (その2)

(記者)

先ほどの発言の確認ですが、「1人も悲しいことがなかったということと言ったわけではない」というお話ですが、これの意味するのは、戦闘行為の中で不幸にも亡くなった市民がいらっしやったということなのか、それとも、意図的に非武装の市民を殺害したことが多少あったのではないかということなのか。どういうことなのでしょう。

(市長)

そのところは非常に難しいところでね。実際そこはどっちかといったらきちっと選別できるものじゃないですよ。残念ながら、なかなか。

(記者)

それはどういうことでしょうか。

(市長)

例えば、よく言われますけれど、北に挹江(ゆうこう)門という門があるんですけど、そこから、要するに、前に将軍が統治していたんですけど、1日前に「降伏する」と言わずに逃げ出されたものだから、大混乱が起こって、逃げようにも後ろ側に督戦隊がおりますので、が一っと仲間の中の。

あまり言うといかんけれどね。ということがあり、皆さん、セーフティゾーンにもものすごい逃げ込んだというのがあるんですね。

そのときに、服を脱いだ場合ですね。だから、一応ハーグ陸戦条約によりますと、ちゃんと「遠くから見て軍人だということがはっ

きり分かる人間はきっちりと保護される」という規定になっていて、そういう場合、戦闘行為と、正当なね、と言えるかどうか。

いわゆる掃討戦と言いますけれど、軍隊が入ったときにずっと中を、いいことであるかどうか知りませんが、掃討することは認められているわけです。モッピングアップ・オペレーション

(mopping-up operation 掃討作戦)と確か言ったと思いますけれど、そういう中の、どっちがどうということは非常に選別が難しいと。

(記者)

そもそも戦闘行為だったのか、そうではなかったのかの線引きが難しかったと。

(市長)

難しいですよ。よく言われているのが、要するに将軍が逃げちゃったから、特に南京の城の外にある軍隊がですね、日本軍がずっと行くと。そちらの蒋介石の軍隊が出てくるときに、本当に降伏してくるのかね。降伏してくると思ったら発砲があったとか、そういうようなことで、やっぱり大混乱があったみたいですよ。

(記者)

今言われたので言うと、非戦闘員と戦闘員の区別も難しかったし、ということなのですか。戦闘行為についても分からないということですか。

(市長)

それは中国側の方も認められとると思いますけれどね。軍隊の最後で、軍旗。いわゆる司令官がいなくなりましたので。降伏するのか、戦闘するのか。そういう中で、非常に中国軍の中でも混乱があったということが言われていますよね。

(記者)

もう1点確認ですが、誤解があったというのはどんな誤解なのか、私は理解できていないのですが、つまり「30万人の大虐殺はなかった」ということをおっしゃりたいのか、それとも「虐殺はそもそもなかったのか」、それとも「殺害行為はあったのか」どうか。そもそも南京のことに、市長ご自身のご見解をもう一度お聞かせください。

(市長)

僕は、いわゆる、僕たちがよく言っています「いわゆる南京事件」と。「いわゆる」なしでもいいんですけど、南京事件と。歴史の教科書でいう南京事件。だけど、わざと「いわゆる」と付けてある

んですけれど、これはどういうことかといったら、それは 30 万人のですね。

きちっと 30 万人か、それが 1 万人多いかどうかは知りませんよ。だけど、南京大虐殺記念館には 30 万人と書いてありますから。

というような中国の非武装の市民を、旧日本軍が虐殺したと。南京占領に際して。それはなかったと。そんなことはなかったと。組織的な大量虐殺ね。ということはなかったということ。

あとの数といいますか、その辺については非常にたくさんの説があり、それこそそういうことを率直に話し合いたいと。

ここで言われても、なかなかそれは断定は難しいんです、大変。それは、今の日中共同、あの会、会議でない、検討でない、どう言うんやった。あそこ（日中歴史共同研究委員会）でも結局各論併記になって、ということになっていますけれど、まず 30 万人が。

あまり言う中国の方に申し訳ないか分からんけれど、日本人としましても、やっぱり 30 万人の中国の方を、それも非武装の市民を日本人が大虐殺したということについては、やっぱり何か一言率直に話をさせてもらわないと。

特に、友好都市をやっているこの名古屋とするとですよ。南京にあるわけでしょう、南京大虐殺記念館は。とっていただきたいと思えますね。

(記者)

では、市長ご自身のご見解では、「犠牲者の数に関してはまだ確証がない」というふうには先ほどおっしゃったのですが、ではその 30 万人というのがなかったと言える確証はどんなことでしょうか。

(市長)

いろいろありますけれど、一番よく言われているのは、昭和 12 年 12 月 13 日が、いわゆる占領と言ったらあまり悪いかな、中国の皆さんに。日本軍が入った日です。

12 月の初めに、いわゆる降伏しなさいというふうには当時の日本軍はビラをまいたりしていますので。当時、外国の名前がたくさん出てくるんじゃないですかね。セーフティーゾーンってあるね。安全保護区。そこへみんな入ったんです。いる人は。非常にそこはきちっとされとったと言われておりました。

そこにいた人口が、12 月の初めだったか、ちょっとすみません、直前、直後ぐらいですが、20 万人です。それから、ほぼ 1 カ月後にもう一回人口の調査をやっていますけれど、セーフティーゾーンが 25 万人で、増えているんですね。これはよく言われている話で

すね。人口が減ったどころか、増えているという話です。これはよく言われております。

だで、中国の皆さんも大変なことです。だけど、やっぱり日本人からして、隣国中国の一般市民を 30 万人も虐殺したと。非武装の。これを言われてそのままになってですね。議論はあるにしろ。それで、姉妹友好都市を継続しなければならない名古屋ですね。大変ですよ、本当に。

姉妹友好都市だって、税金をいくら使つとるかちょっと知りませんが、延々と使うのはいいけれど、みんな努力しとると思うけれど、ぜんぜん広まらないですわ、悪いけれど。

現に南京に進出しとる企業は、今大変努力されとる方に申し訳ない。絶対危害に関わらんようにしていただきたいんですけど、2 社です。名古屋からは。上海に比べると 80 分の 1 で、人口比ですしても 20 分 1 です。住んどる日本人も。

そういうものを、実質的に、ただ「友好だ、友好だ」と言つとるだけじゃなくて、やっぱりそのトゲを抜いて、本当に南京の人と仲ようするようにせないかんのじゃないですか。今のままじゃいかんと思いますよ。と思うんです、本当に。

日本の人たち、名古屋の人が、南京に遊びに行こうかと。古い都市ですからね、あそこも。中国四大古都ということで、ものすごい歴史のあるまちだから、もっと気軽に南京に観光に行こうと。南京で商売をやるるか、というふうに行くようにするにはどうしたらええかということ。

それは僕の体験の中から言うと、どうしてもこの 30 万人大虐殺というやつね、これが喉の奥のトゲのようになって、どうしてもいかんのですよ、うまく。という気持ちなんですわ。

ただじっとしとって、こんなこと言わずにじっとしとりゃええのかという気持ちにならないんでね、僕。一応名古屋市長として、南京と友好都市提携をやっているからね、何十年も。どうせやるんだったら、みんな本当にフランクな楽しい気持ちになって、昔の歴史的な大都市ですから、南京は。そこへ名古屋の人が行けるようにしたいと思つとるわけなんだ。

だけど、繰り返しますけれど、若干思うのは、本当に「いわゆる南京事件はなかった」と言わずに、仮に、「いわゆる 30 万人南京大虐殺はなかったと思います」と、友好使節団の方にそういう言葉でもそのまま使っておけば。分からんですけれどね。その方が良かったとは。

僕は、だけど、そういう言い方はすべきじゃないと思いますけれどね。友好使節団がせっかくみえたときは。気を使って、僕は発言させていただいたのね。ちいと優しく。

だけど、この問題だけの討論会じゃなかったですから、本当に。本当にお世話になって、おやじの時代からありがとうございます、という会だったですわね。

3月13日(火曜日)、会見

質疑応答

◎「いわゆる南京事件」に関する発言について

(記者)

市長の「いわゆる南京事件はなかったのではないか」という発言についてです。前回の定例会見以降、市として中国側の関係者にどのような対応を取られましたか。それから、今後どのような対応をお考えでしょうか。

(市長)

交渉事ですので、対応は取らせていただきますけれど、内容につきまちはちょっと控えさせていただきたいということです。

(記者)

どのような時点でご説明をいただけるのでしょうか。

(市長)

連絡を取って「話してもええよ」となればええんですけれど、一応そういうことです。

(記者)

そうすると、向こう側からはまだ、そういう「話ししてもいいよ」という確認が取れていないので、対応についてはちょっと話せない。

(市長)

まだ今のところはね。

(記者)

対応の経過というのは難しい部分があるのかもしれませんが、例えば、日中共催で開く予定だった「南京ジャパンウィーク」が中止になったり、そのほかにも柔道の交流イベントが中止になったりと、いろいろな影響が出てきているのですが、そのことについては、市長としてはどう思われますか。

(市長)

それはお答えさせていただいておりますけれど、残念に尽きるということです。

24年4月2日 市長定例記者会見

報告内容

質疑応答

◎「いわゆる南京事件」について（その1）

(記者)

確認なのですが、先週に、市民市民団体が、南京の件で、向こうの館長さんから、「公開質問状を既に1カ月前に名古屋市に対して出しているのに、その答えが返ってきていないのですが、どうなのか」という意見を市民団体が持ち帰ってきたのですが、回答はされていたのですか。

(市長)

それは、しておりませんね。見ていませんし。

(記者)

では、届いてきたかどうかの事実確認はまだ取っていないということですか。

(市長)

はい。

◎「いわゆる南京事件」について（その2）

(記者)

今、南京の話が出たのですが、本年度中に南京問題をどう市長としては収束を付けていきたいかという見通しと、「尾張名古屋共和国」についても、今年度、どういうことを目標にやっつけていかれるか、お願いします。

(市長)

南京問題につきましては、今までいろいろお話ししたるようなことでして、政府見解とほぼ同じですので、実際の話。ぜひ真の中日友好が進むように願っております。

私のあの発言は、インターネット上のメ〜テレ「UP!」というのに出てまいりますので、見ていただいて。ただ、あとの贈り物を交換しとるところやは切れておりますけれど。非常に親密にやらせていただいとるのが切れておりますけれど、出ております。

ただただ、正しい相互理解の上における、真の中日友好が進むようにと願うばかりでして、そのことにつきましては、思い付きで言ったのでは決してありません。確かホームページに出とると思います。うちにもありますけれど、市長室にもありますけれど、国会議員時代のときに質問主意書を出してござりまして、政府見解のしっかりしたものをもらってござります。そういうことで、祈るばかりです。